

平成三十年度 札幌日本大学中学校

入学選抜試験

国語

試験時間 60分

注意

- 一、指示があるまで、問題冊子さつしを開いてはいけません。
- 二、答えは、解答用紙に記入してください。問題は、からまであります。
- 三、試験監督かんとくの先生の指示に従したがって、試験を開始してください。
- 四、試験の途中とちゆうで、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
- 五、試験開始の指示があつてから、解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
- 六、解答用紙には、解答以外を記入しないでください。
- 七、試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
- 八、机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪かぜなどにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生に申し出てください。
- 九、本文の中からぬき出す場合は、特に指示がない限り、句読点や「」等の符号ふごうも一字として数えてください。
- 十、本文中の*は、本文の後ろに意味の説明があるという印です。

次の文章は、大学で歴史を教えている「祖父」と、その「祖父」を慕っている「私」が公園で話をしてるところです。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(本文は一部表記を変えたところがあります。)

「ねえ、おじいちゃん」

「なんだね」

「おじいちゃんはいつもゆっくり読むね」

書物から視線をあげ、うっすらと微笑む。白髪に細かな陽がちらちらと当たっている。

「おばあちゃんがいったよ、ずっと前からそうだったって。大学の教室で会ったときも、まるで重い石をひっくり返すみたいに、文庫本のページをめくってたって」

祖父は声にだして笑った。乾いた太鼓を指先で撫でるような声だった。私は祖父の気をひけたのが嬉しく、空のグラスにぬるい水を注ぎ足しながら、昔っから、おじいちゃんは本がいちばんの宝物なんだね、といった。

「ほう」

祖父は目をぱちぱちとさせていった。

「そう見えるかね」

「本の虫っていうんでしょ。学校でさ、ぼくをそうからかうやつもいる。でも、ぜんぜん相手にしない。本のなかに、どんな宝が詰まっているか、考えてもみないんだ。みんな最低のうすら馬鹿たちさ」

「学校の友達は、あまり本を読まんのかい」

「ぼくの友達は本だけだよ」

私は得意げにこたえた。

「本とおじいちゃんがいれば、ぼくはそれでいい。ほかに何もいらぬい」

祖父は革装の表紙をとじた。藤棚から差しこむ光をまぶしげに見あげながら、おまえは少し、考えちがいをしてるよ、といった。

「わしが、本を読むのが遅いのはな、べつに読むのを、楽しんでるからじゃあない。それどころか、もともとわしは、

本に書いてることなんて、どうでもいいと思っていた」
「どうでもいい？」

私は戸惑い、^(A) おうむ返しにたずねた。

祖父はうなずき、わしの宝物は、本に書いてあることなんかじゃなかった、ききたいかね？ と笑った。そして、私がうなずくより先に、六十年前に住んでいた、白砂のひろがる、海辺の町の話をはじめた。

祖父はそのころ、海と映画と自転車に夢中な、陽に焼けた少年だった。^(a) ホウカゴには友人を引き連れ大人用の船で外海に出た。網にかかるのは、タコ、アワビ、無数の小魚。壺や陶器の破片が出れば、海岸へ持って帰り、*水切りをして遊んだ。

鉄道の線路が敷かれて以来、その港町は氣候のいい別荘地として全国に知られつつあった。高台の白壁の屋敷に、その家族が滞在したのは、祖父が十六になった夏のことである。少年たちは自転車を飛ばし、急な坂道を駆けあがった。*幌付き乗用車が三台、車寄せにとまっていた。生け垣から覗きこむと、背の高い主人が、馬のような犬に餌をやるのが見え、そのそばで帽子を脱いだ妻の細面に、祖父はなんとなく見覚えがあると思った。記憶をたぐるうち、前年の冬に見た、悲恋映画の主演女優の顔にいきあたって。主人は妻の尻をぺしゃぺしゃとたたき、妻はあの映画のなかで一度も見せなかった大口をひらいて、海鳥のような声で①笑った。最後の乗用車から、瘦せた白い影がひらりとおりてくる。犬が嬉しげに尾を立て吠えまわった。⁽¹⁾ 祖父は生け垣の枝を握りしめたまま前のめりになった。少女は純白の半袖を着ていた。夏の陽ざしを浴びた、ひとり娘の横顔は、祖父がこれまでに見たどんな女優より優美な輪郭を描き、まるでうしろから波しぶきを浴びたように、そこだけきらきらと輝いて見えた。

主人は生け垣を振り向き口笛を吹いた。覗いていた少年たちは顔を見合わせ、^(B) ばつが悪そうに、そろそろと庭へはいつていった。妻はさも女優らしい笑みをつくり、みんな、娘と仲良くしてあげてね、といった。娘は桃色の唇を片側にまげ、少年たちを*睨めつけて、

「サラマンダーもよろしくね」

といった。巨体の黒犬は牙のあいだから粘っこいよだれを垂らしグルグルとうなった。

翌朝、門前に自転車をとめたのは祖父ひとりだった。いきなりサラマンダーが飛び出してきて、フレームごと前輪をがっしりとくわえた。祖父はサドルにまたがったまま、ちらちらと雀の肉片を振った。水切りのヨウリヨウで坂道の下へ投げる。サラマンダーは無視した。門のむこうからズボン姿の娘が現れ、

「へんな餌あげないでよ」

「仲良くなるつもりだったんだ」

祖父もきまり悪そうにこたえた。娘が指を鳴らすと犬は自転車から離れ（②）屋敷のなかへは行っていった。祖父はサドルをおりると、ポケットから青みがかった陶器の欠片をとりだし、娘の前に差し出した。娘は陶片をとり、きらめく朝日にかざして片目をつむった。閉じられた片目の睫毛に祖父はみとれた。娘の髪から真新しいオリーブ油の香りがたちのぼっていた。

「こーいうの、どこで拾うの？」

「磯に洞窟があるんだ。俺しか知らない」

(2) 祖父は胸に息をためてこたえた。

「今から、連れてってやってもいいけど」

「別に行きたかないわ。靴が濡れるもの」

と、いって娘は、肉の投げ捨てられた坂の茂みへ、陶片を放り捨てた。

「それより町を案内してよ」

娘を荷台に載せ、祖父はその日、町じゅうを自転車で走りまわった。きゃあきゃあとはしゃぐ娘のからだは空気のかたまりのように重みがなかった。翌日は海岸線をツタい、打ち上げられた客船の残骸を見にいった。その翌日は丘をのぼり、風車の並ぶ畑地を駆けぬけた。娘は祖父に、キシュクシヤでつけられた秘密のあだ名を教えた。石造りの寝台で祖父は夜ごと吐息のようにそのあだ名を繰り返した。

一週間ほど、ともに過ごしたある日、祖父は彼女を夕方の映画に誘った。娘はあからさまに嘲笑を浮かべ、そんな昔の映画、目が腐っちゃうわといった。それよりあんだ、字は読めるの？ 読めるさ、と祖父はこたえた。無声映画の字幕でおぼえたのだ。娘はいたずらっぽい笑みを浮かべ、家まで送ってよ、といった。明日あんだに、素敵なおほうびをあげる、

お昼に駅前広場に來て。

翌朝、祖父は染みのついていないシャツを着て広場を訪ねた。娘は前日と同じ笑顔で先にきてポプラの下で待っていた。

「あんた、私が好きなのね」

(3) 唇をかみうつむく祖父に、けらけらと母親そっくりの笑いを投げ、

「あんたに手紙を書いたの。ひと晩かかったのよ。おかげでもう眠くて」

(4) 祖父は素早く顔をあげた。娘は無造作に腕を伸ばし、広場に面した古書店を指さすと、

「あそこの本のなかに挟んできた。すぐ読まれちゃ癩だもの。手紙を見つけられたら、夜中にふたりきりで、あんたの洞窟にいつてあげてもいいわよ」

立ちつくす祖父に、娘は、さ、早く！ とささやいた。祖父は広場を横切り、古書店の戸口を押しあけた。かびの臭いがふんと鼻をついた。書棚はどれも天井の暗がりまで達し、棚ばかりでなく、店のそこらじゅうに、革でできた柱のように古びた本が積み上がっていた。店の奥で咳払いがきこえた。いいシャツを着てきて良かったと祖父は思った。手近に置かれた本をとり、最初のページからぱらぱらとめくる。見たこともない外国の文字。なにも挟まっていはいないようだ。祖父は二冊目をとる。つづいて三冊目。十数冊を無駄にめぐり終えたとき、いつの間にか真横にきていた針金のように痩せた店主が、買う気がないなら出て行けと低い声でいった。祖父は肩を落とし戸口から出た。そして真夜中、懐中電灯をもつて、倉庫の小窓から店にはいった。

* 脚立に腰をおろし、祖父は片端から書物をあさった。なかには読める本も少なからずあった。拾ったことのある貝殻、みおぼえのある陶器の絵柄。祖父は朝がくるまででいいいにページをめくりつづけた。娘の書いてくれた手紙は葉ほど小さいのかもしれない。

四日後の深夜、うしろから店主に光を照りつけられたとき、祖父はまだ書棚の五分の一しか手をつけていなかった。わけを話すと、店主は皮肉っぽく口をゆがめ、明日から店にきて無給で本の整理をしろ、といった。乾いた布で一冊ずつ拭くんだ。そうすりやお巡りは呼ばないでおいでやろ、う。

作業の合間、自転車で何度か屋敷をたずねた。門の前までシヨウタイ客の嬌声が響いてきた。窓のむこうの娘と目があつたこともある。娘は鼻に皺をつくり、本をめくる真似をした。祖父は自転車を駆り、古書店にもどつた。

数千冊のページをすべてめくり終えたのは、夏休みが終わる二日前だった。見つかったのは古びた数通の請求書、署名のない*小切手のみだった。屋敷をたずねていくと、そこには誰もいなかった。庭の茂みから、黒い犬が現れ、のろのろと門のほうへ歩いてきた。捨てられたサラマンダーは、自転車の前輪を懐かしげにかぎ、祖父のくるぶしに、木の実のようなかたちの頭を（③）擦りつけた。

「それから三年、古本屋で働いた」

と祖父は水を飲んでつぶけた。

「サラマンダーはどうなったの？」

「本屋でしばらく飼ってたが、ある日客にとびかかってな、保健所に送るしかなかった」

祖父は深々と吐息をついた。

「歴史科を受けるようすすめてくれたのは店の主人だった。入学金も貸してくれたよ」

私はなにもいえなかった。祖父は藤棚の下で革装の表紙を撫でながら笑った。

「わしが、本をていねいにめくるのは、手紙をさがす癖がついちまったからさ。いまでも思うときがあるんだ。真夜中の古本屋で、わしはひよっとして、ページに挟まった手紙を見落とすしちまったんじゃないかな。本に書かれたことなんて、一行だって大切じゃなかった。⁽⁵⁾ わしにとつて宝物といえは、十六の夏、どうしても見つけたせなかった、あの手紙なんだよ」

（いしいしんじ『サラマンダー』・『本からはじまる物語』より メディアパル）

* 水切り……川や海に平たい物や石などを投げて、水面をはずんで飛ぶようにする遊び。

* 幌……風雨や日光などを防ぐため、車の上にかける布製の屋根。

* 睨めつけて……にらみつけて。

* 脚立……高い場所にある物を取るための、四本の脚がついた踏み台。

* 嬌声……にぎやかで楽しそうな、女性の笑い声。

* 小切手……銀行にあずけているお金の中から、一定の金額を受け取るために銀行に支払いを願ひ出るための紙片。通常の郵便用の切手ではない。

問一 — 線(a)～(e)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 (①) (②) (③) に入る最も適当な語句を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(同じ記号を選んではいけません。)

- ア きらきらと イ からからと ウ ずんずんと エ ごしごしと オ もじもじと
カ けらけらと キ とことこと

問三 — 線(A)「おうむ返し」、(B)「ばつが悪そうに」の本文中での意味として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (A) ア 相手が言ったことをそのまま繰り返すこと イ 相手が言ったことをよく考えようとする
ウ 相手が言ったことにすぐに返事をする エ 相手が言ったことに答えなくておくこと
オ 相手が言ったことに対して言い返すこと
- (B) ア 開き直ったような様子で イ すでにあきらめている様子で
ウ いかにも気まずい様子で エ 何事もなかったかのような様子で
オ すなおに非を認める様子で

問四 — 線(1)「祖父は生け垣の枝を握りしめたまま前のめりになった」とありますが、これはどういうことを意味する表現ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 通りすぎたはずの妻が、ふたたび白い洋服を着て出てきたように思えて混乱したということ。
イ 白い影がどのような人物であるのかが気になり、なんとかして見とけようとしていること。
ウ 白い影をした大きな犬がいきなりほえ始めたので、その声におどろいてしまったということ。
エ 車の中からふいに現れた白い影が魅力的な少女であったので、思わず見入ってしまったこと。
オ 急に現れた白い影が自分が探していた少女であったので、喜びに我をわすれてしまったこと。

問五 — 線(2)「祖父は胸むねに息をためてこたえた」とありますが、この時の「祖父」の心情を、五十字以内で説明しなさい。

問六 — 線(3)「唇をかみうつむく祖父」から、 — 線(4)「祖父は素早く顔をあげた」における「祖父」の心情の変化を説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア はっきりと口に出して言っではない娘への好意を、娘からからかうように言われたので腹立たしく思ったものの、手紙を書いたと聞き、その娘を許してあげようと考え直している。

イ はっきりと口に出して言っではない娘への好意を、娘に見すかされて気がめいってしまったが、手紙を書いたと聞き、今後は娘と文通ができると希望を持ち始めている。

ウ はっきりと口に出して言っではない娘への好意を、娘からさげすむように言われたので悲しくて落ちこんだが、手紙を書いたと聞き、娘も自分のことをまじめに考えてくれると思っ直している。

エ はっきりと口に出して言っではない娘への好意を、娘に知られていると分かりうるたえてしまったが、手紙を書いたと聞き、またつき合ってもらえると考え、冷静な気持ちになっている。

オ はっきりと口に出して言っではない娘への好意を、娘から指摘してきされてくやしうはずかしかったが、手紙を書いたと聞き、娘からも好意を持たれているかもしれないと思っ、気を取り直している。

問七 古書店で手紙をさがす「祖父」の心情を、最も具体的に表現している一文を、本文中から見つけ、最初の五文字をぬき出して答えなさい。

問八 この文章で、「サラマンダー」は、どのような存在として表現されているでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘の行動をそのままなぞっているかのような、欲が深くわがままな存在として表現されている。

イ 最初はうちとけなかったが、娘との別れのあとにそのさびしさを共有する存在として表現されている。

ウ 若い祖父の前に立ちはだかった、どうしようもできない運命を物語る存在として表現されている。

エ 娘の家族であるお金持ちの人たちと同じく、強大な生命力や財力をもった存在として表現されている。
オ わがまま勝手に生き、最後は家族から見捨てられる娘と同じ運命を持つ存在として表現されている。

問九 ———線(5)「わしにとって宝物といえ、十六の夏、どうしても見つけだせなかった、あの手紙なんだよ」とありますが、見つけだせなかった手紙を「宝物」と考えるのはどうしてでしょうか。「祖父」の心情にそって、八十字以内で説明しなさい。

次の記事や資料を読んで後の問いに答えなさい。



タイの農村で田植えに励む女性たち
=2008年7月

インド南部のデカン高原に広がるアンドラプラデシュ州の穀倉地帯。雨期を待つハンワダ村の土は乾き、ひび割れていた。

農家の男性が農薬を飲んで自殺したのは6月中旬だった。田んぼに水を引く井戸を掘るため、*高利貸から15万^{ルピー}（約40万円）を借りた。しかし、100^{ルピー}掘っても十分に出ない。借金の取り立てに追われた末のことだった。妻が嘆く。「水さえあれば、死ぬ必要はなかったのに……」

産業発展の陰で、インドでは貧しい農民の自殺が相次いでいる。この10年で16万人以上。地元の農民組合の事務局は、「自殺者は千ばつの年に増える」と話す。

この州の降水量は年700^{ミリ}程度と東京の半分ほどで、水不足が深刻だ。内陸の多くが雨頼みの*天水農業。インドのかがい率は4割。2千万もの井戸があり、水のくみ上げすぎで地下水位は年々下がっている。

インドはアメリカに次ぐ世界第2位の耕地面積を持ち、中国に次ぐ世界第2位のコメ生産国。2050年に人口は16億と中国を抜いて最大になる。その時の世界人口は90億を超え、穀物全体の*需要は30億^トと今の1.5倍に膨らむと予測される。世界の穀物のほぼ1割にあたる約2億^トを生産する⁽¹⁾インドの行方は、世界の*食糧安全保障を左右する。食糧需要の高まりで、ますます水の重要性は増す。

水不足に対し、インド政府はため池など小規模のかんがい整備に努める一方、大規模なかんがい事業で対応しようとしている。だが、いくつもの州が河川の水を使う権利で対立する「水争い」が早くも起きている。

東南アジアでも、水が食糧増産のカギを握る。

タイ政府は、ラオス国境を流れるメコン川水系の水をタイ東北部に引き、大規模なかんがい網を巡らす事業を決定した。タイは世界のコメ貿易量の3割前後を供給する輸出国だ。約2千万^トを生産し、約半分を輸出してきた。1993、1994年に起きた日本のコメ不足の時も、緊急輸入したのはタイからだ。

だが、コメ生産の半分を占める東北部は深刻な水不足に陥っている。農地の8割が天水農業だが、最近2、3年おき

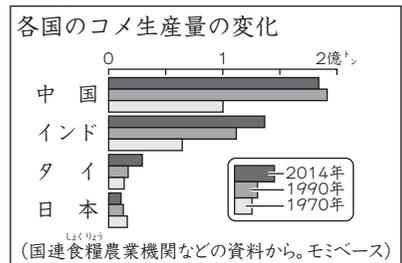
に干ばつが起きる。ため池を掘ってかんがいがに努めているが、同じ面積でみた収穫量は日本や中国よりずっと少ない。東北部の巨大事業が動き出したのは、水さえあれば、外貨を稼げるコメ生産の拡大が見込めるとの思惑からだ。タイ政府コメ局の局長は「東北部のかんがいを実現すれば、コメ生産の倍増も可能」と言う。だが、事業には疑問の声が尽きない。専門家は「⁽²⁾ベトナムの反対もあり得る」と話す。

⁽³⁾限られた水を分け合い、急増する食糧需要に⁽¹⁾応えることができるか、そこに地球の未来がかかっている。

- * 高利貸……高い利息を取って金銭を貸すこと。
- * 天水農業……作物への水やりを、田畑の上に降る雨だけに頼る農業。
- * 需要……必要として求めること。「食糧需要」は、世界で必要とされる食糧の量のこと。
- * 食糧安全保障……食糧は、食べ物のうち特にコメや小麦など主食を指す。食糧安全保障は、食糧の安定した供給を守ること。

(朝日新聞社「今解き教室」より)

資料1



問一 次の文章はインドのコメ作りの変化と問題点についてまとめたものです。

文中の ① ～ ④ にあてはまる言葉を記事、資料1を参考にしてそれぞれ語群から選んで記号で答えなさい。同じ言葉を二度使うことはできません。

最近のインドのコメの生産量は急激に ① しています。理由の一つに、農家が小さな井戸を掘るかんがい農業が広がったことが挙げられます。1970年に比べると、2014年には約 ② 倍以上に伸びています。一方、日本のコメ生産量は、年々 ③ 傾向にあります。ただ、インドではかんがい農業の影響で問題も発生しています。それは ④ という問題です。

〔語群〕

ア 増加 イ 減少 ウ 1 エ 2 オ 3

カ 高利貸が増加し、貧富の差が拡大している

キ 貧しい農民の自殺が相次いでいる

ク 水のくみ上げすぎで地下水位が年々下がっている

ケ 2050年に人口が16億と中国を抜いてしまう

問二 — (1) 「インドの行方は、世界の食糧安全保障を左右する」とありますが、具体的な数値を用いて、その理由を説明しなさい。

問三 — インドでは、政府が大規模なかんがい事業を進めようとしたことで、どのような問題が起きたか、説明しなさい。

問四 — タイ東北部で計画されている大規模な事業はどのようなものか書きなさい。また、政府はこの事業により、どんな効果を期待しているか、説明しなさい。

問五 — (2) 「ベトナムの反対もあり得る」とありますが、それはなぜだと思いますか。記事と資料2を参考に、あなたの考えを書きなさい。

問六 — (3) 「限られた水を分け合い、急増する食糧需要に応える」とありますが、急増する食糧需要に応えるためには、「水の分け合い」以外にどんなことができると思いますか。あなたの考えを書きなさい。

資料2



下書用紙

